

解説

石井啓一郎

本稿はイランにおけるペルシア語現代詩の大家として知られたモハンマド・ホセイン・シャフリヤール（一九〇六—八八）が遺したアゼルバイジャン語連作詩『ヘイダルババよ ごきげんよう（Heydərbabəyə Salam）』第一部からの抄訳である。厳密にいえば、イランの詩人である作者が本作で用いた言語は、イラン北西部「アーザルバイジャン三州（東アーザルバイジャン州、西アーザルバイジャン州、アルダビール州）」に住む人々の多くが母語とするテュルク系の言語、と書いたほうが正確である。アラス川を挟んで北にイランと国境を接する現在のアゼルバイジャン共和国の言語と、このイランの言語は実質的に同一であり、いわゆる「アーザルバイジャン三州」とアゼルバイジャン共和国とでは南北にひとつの言語圏が広がっている。イランのなかで、この言語は多くの場合「トルコ語（Türkçe）」あるいは「アーザリー・トルコ語（Türkçe Azarî）」であり、むしろトルコ共和国公用語としてのトルコ語はしば

しば「イスタンブールの言葉」という意味の「エスタンブリー（Estanbul）」の呼称で区別されている。訳者がこの作品を「アゼルバイジャン語」で書かれたと表記することにはいささかの躊躇いを覚えるのは、「アゼルバイジャン共和国の公用語」としての意味のこの呼称を遣うことが、イラン側に居住する「トルコ人」を国民概念としての「アゼルバイジャン共和国」に包含してしまうことの不正確性にいささかの危惧を覚えるからである。それは特にアゼルバイジャン共和国側に根強く存在する、アラス川の北と南はほんらいひとつの「国」であるとすると政治的言説（「アゼルバイジャン・ナシヨナリズム」）の文脈において、黙示的にであれ、特別な意味合いを帯びてしまう可能性があると考えられるからである。シャフリヤールを読み解くときに、常に心の片隅に留めておくべき事項なのであるが、この点をお断りしたうえで、本稿では作品の言語は以後便宜的に「アゼルバイジャン語」と表記する。

シャフリヤールは一九〇六年にイランのタブリーズ生まれであるが、幼年時代はホシュゲナーブにある農村で過ごしている。その村に本作に詠われるヘイダルババの山が聳え立っていた。一九五四年に刊行された本作はシャフリヤールが幼年時代の思い出の情景を昇華させたものといえる。

イランにおいてのシャフリヤールはペルシア語現代詩の領域で敬愛される大家である。イラン現代詩の歴史のなかに革新的な新詩体を創造した大詩人ニーマー・ユーシージとも親交があり自由韻律詩も書いているが、数の上で多くはガザルやマスナヴィーといった古典の詩体と韻律を踏襲した新古典主義的な作風を特徴としている。詩の主題としては、恋愛を含めた個人体験に基づく内的真実、郷里であるイラン北西部のアーザルバイジャン地方の自然の風景、信仰に根差した倫理観などを踏まえたテーマを選びながら詠んだ内省的な作品が多い。他方、シャフリヤールは量的にペルシア語詩に対して少ないものの、アゼルバイジャン語による少なからぬ詩的創作を残している。アゼルバイジャン共和国でマハンマドヒュセイン・シャフリヤール（Mahammadüseyn Şahriyar）との表記で親しまれ、彼のアゼルバイジャン語詩は同国のラテン・アルファベット正字法によって刊行され、人口に膾炙している。知識人層も含めて、最初に言及した「アゼルバイジャン・ナシヨナリズム」という政治的立場に共鳴する者が多くいるアゼルバイジャン共和国側には、「シャフリヤール」は南北にわたる「国民分断」を嘆いてイランのなかで声を上げた人物である、という受容が存在することも事実である。その端的な例はアゼルバイジャン共和国の国民的詩人のひ

とりと知られたバフティヤル・ヴァハブザダ (Bakhtyar Vahbzada 一九二一—二〇〇九) がソ連時代とソ連崩壊後にわたって遺した『ギユリユスタン Gilyistan』(一九五九)、『殉教者たち Shahdar』(一九九〇)、『独立 Ishtiqal』(一九九九)の長編詩三部作にみることができる。

現時点で訳者は断定的なことを書くのはまだ慎むが、シャフリヤールが「トルコ語」話者である人々の独自性を明確に意識して、「テヘラン」に象徴されるベルシア語圏から異化したという意識は確実であったと思われる。しかしヴァハブザダやサマド・ウルグン (Samad Vurgun 一九〇六—五八) といったアゼルバイジャン共和国の文学者がステロタイプ化した国民対立の図式や、南北アゼルバイジャンの一体性といったある意味過激な政治的テーマにシャフリヤールが積極的に共鳴したり、またそれを代弁したと言えるほどの証拠を今の時点で訳者は彼の作品中から読み取ることができないと考えている。

本作をアゼルバイジャン語で書いた理由は自身が明らかにしている。それは健康を損ねた時期に献身的に彼の世話をした母親との関係が、彼をして「子供の時に自ら使ったが言葉そのもの」で書くことへの誘因となったのである。本作の言葉はタブリーズの口語表現を多用

した独特なものである。その詩体は訳文と解説中にもしばしばみる「アシク」という吟遊詩人が詠む音節詩のスタイルを踏まえている。作者自身が「過ぎた時の絵 (ベルシア語 *rah-rohā-yā gozashkehā*)」と述べたとおり、本作はタブリーズと周辺地域での「ノウルズ」(イランの正月)の祭も含めた習俗、自然の風景、農作業、婚礼などの村の生活、思い出に残る親戚や近隣の個人々の点描である。本作をアゼルバイジャン語で書くことを選択した理由は、あくまでも詩人の内的欲求にもとづくもの、また「再生、再生」の個人体験に基づくものであったことを忘れるべきではない。

同時に本作の宗教性や、そこに拠って立つ倫理観との関係を意識しておく必要も指摘したい。本作にしばしば登場する語彙 *ayūb* は、究極的で不可避の宿命としての「死」によってもたらされる別離や喪失、あるいは相互に解りあえずに不和に陥る人間の倫理的な疎外や孤立と解するほうが、本作全体の文脈のなかでは自然であり、本作に限れば「国民や国家にもたらされた政治的分断」を読み取ることが直喩としてあれ、換喩としてであれ、難しいと思われる。

最後に本訳稿の構成について触れておきたい。本稿は『ヘイダルババ』一九五四年刊の「第一部」に収められた七十六篇の五行詩からの抄訳である。この第一部初版刊行の折、シャフリヤ

ールはアゼルバイジャン語の本篇にベルシア語で附記をつけて、作中に言及した習俗や地誌、自身の交友範囲にいた名もなき個人々人についての説明を遺している。このシャフリヤール自身による説明をそのまま訳出、あるいは訳者が適宜編集、補足しながら以下に必要と思われる詩篇についての解説を附す。作者本人の附記を補足するうえで最も有用であった資料は、キャリーム・マシクルーテチが『ヘイダルババ』のテクストにベルシア語対訳を附し、詳細な説明を提供した次の一冊である。

Karim Mashrūtechi, * Heydar Bābā-ye Shahriyār*, dar Āyine-ye Zabān-e Fārsī Hamrah-e Man-e Torkī-ye Azari, Muwasse-ye Enteshārāt-e Negāh, A.H.1392 (Id), Tehrān

訳稿内で原語を引用、言及するときは、「ベルシア語」などの特段の表示が先立っているものを除けば、すべてアゼルバイジャン語である。本作はすべてイランでのベルシア文字による正字法によっているが、本稿の原語表示はラテン・アルファベットに翻字している。その際の表示はアゼルバイジャン共和国で刊行された次の版に準拠して、現代アゼルバイジャン語正字法によって表示している。

Məhəmmədhusəyn Şəhriyār, Seçülmüş Əsərləri, Azərbaycan Elnlər Akademiyası 2000 Bakı

【第三篇 記者注記】 本作中にしばしば言及

されるノウルズ (Novruz、ペルシア語 Nowruz) は春分(3月21日)に元日を迎えるイラン歴の正月のことである。

【第八篇 作者附記、記者補】 ミルアジユダルは当地でヘイダルババ山のチャウシユ (Caus) 隊商を率いる案内人)として知られた人物。アシク・リュスタムはアシクと言われる吟遊詩人・音楽家で同じく当時有名であった人物。

【第九篇 作者附記、記者補】 「アシクの林檎」とは、色が赤と黄色の二色で半々になる林檎の種類。アシク (Asiq)とは吟遊詩人のこと、直訳的には「恋するもの」という意味である。テュルク系諸族の伝承では吟遊詩人とは、生まれたときに神が夢にみせた恋人(想い人マアシク Masuq)の姿を一生追い求めて詩を詠むとされている。そのため赤、黄色二色で半々であることを、アシクとマアシクとの対にみためて、この呼称がある。

【第十篇 作者附記、記者補】 グル・ギョリユ (Quru Goli) はタブリーズからテヘランへ向かう街道沿いにある大きめの湖沼の名前。鷺鳥や水鳥が多く集まる。夏場に水かさが増じるために「グル・ギョリユ(乾いた湖)」の名

がある。

【第十四篇 作者附記、記者補注】 ここにいう「シエイヒユリスラム」は、村にいた説教師(ペルシア語 šeyh va rihān)であり、知識人(ペルシア語 rowshanfekr)として尊敬を集めた人物である。彼の若い時分には声良かった。なおキヤリム・マシユルーテチの解説では、これはいわゆるムアッズイン(アザーンを朗誦する者)であるという。

【第二十篇 記者注記】 三匹の山羊シヤンギユル、シユンギユル、マンギユルと狼の話はアゼルバイジャンに伝わる民話である。記者が知る話は、仔山羊を喰われた母山羊が鍛冶屋(人間)の助けで狼に復讐するところで落着する。民話に複数のヴァリアントが存在することは珍しいことではないが、本篇にシャフリヤールは「吹雪と風に閉ざされた冬の夜に、村の老女たちが、狼がシヤンギユルとマンギユルを攫う話を子供に語って聞かせた」以上の物語を示さない。第七十四篇で、彼が聞き知ったヴァージョンでの「コログル (Koroglu) 物語」の顛末を簡潔に伝えているのと対比すると興味深い。

【第二十五篇 作者附記・記者編集】 イランでタブリーズ近隣にあったふたつの婚礼の風習

である。

・第二行 盆のうえにヘンナをいれた鉢を灯明と一緒に(ヘンナも灯明ともに縁起物)のせて、女性たちが招待客にまわす習慣。客はヘンナと灯明を取って引き換えに、各々に相応な範囲で「化粧代」名目の祝い金を盆に置く。
・第三行 馬に乗せられて導かれた花嫁の足許をめがけて、新郎が屋根の上から林檎を力いっぱい投げつける。林檎は花嫁の足許で碎けるように予め刃物で切れ目をいれてある。満腹を象徴する林檎を砕くことで、二人に飽きがこないよう祈願する。

【第二十七篇 作者附記・記者編集】 田舎の家には天井に換気と竈の煙を逃がすことを目的とする孔があけてあるが、この孔は別の役割も果たしている。チャハールシヤンベ・スーリー(一年で最後の水曜日)以後に、皆家の屋根に上がって、誰かわからぬように(この換気口から)家人はめいめい、色とりどりのシヤル(といわれるシヨール)を吊るしておく。シヤルが「新年に贈り物が欲しい」という意味である。
家の主(あるじ)はこれを見たら知恵を働かせて、それぞれのシヤルは誰のものが、そしてその持ち主が欲しがりそうな適当な贈り物を見繕ってシヤルに結び付けておく。あの頃の贈り物は、羊毛で花模様の靴下、絹のハンカチ、子供

用の口琴、きれいに色づけした鶏の卵、菓子、ナッツだった。

〔訳者補注〕 第二行に言及されるのは、マシユルーテチの解説によれば、編目ひとつひとつに幸運の願いを込めた願懸けとして、許嫁のために靴下を編む習慣である。

【第二十八篇 作者附記】 このとき私の祖母のハーンム・ナネ（ベルシア語名 Khatoun name

詩篇中ではアゼルバイジャン語のハン・ナナ Khatunene）が亡くなった。私たちは新年の祝賀に加わるべきではなかったが、子供であった私は意地をはってシャルを掴むや、遊び友達でいここであった「グラム（ベルシア語名 Chotam 作品中ではグラム Gulam）の家へ走って、屋根からシャルを吊した。グラムの母で、もう亡くなったファティマ小母さんは、それが私のものだと察して靴下を結び付けてくれたとき、わたしたちを残して逝ってしまったハーンム・ナネを思つて落涙していた。あの日見た鄙びた婦人の気高い面持ちは、一幅の忘れがたい絵となつて、私のなかに残っている。

【第三十一篇 作者附記】 アーザルバイジャンではふつと、チャハールシャンベ・スリーリーの朝に流れる水のうえを跳んで、次のような句を唱える。

『わたしの運気は幸せな運。アツラーの祝福あれ！ 白い両手には赤いヘンナ。アツラーの祝福あれ！ 跳べ、チャルシャンベ！ この日は開運のチャルシャンベ！』

〔訳者補注〕 本篇で描くのはベルシア正月のノヴズ前、タブリーズでの年越しの風景である。チャハールシャンベ・スリーリーの日にテヘランなどでは、災厄、悲しみの象徴である「黄色」を祓い、幸運と平安の象徴である「赤色」を呼び寄せる次のおまじないを唱えつつ火の上を跳ぶことが知られる。

『わたしの黄色はあなたにあげる。あなたの赤色をはわたしにください』

シャハレヤール自身が（上に引いた）附記に述べるとおり、タブリーズでは澄んだ流水のうえを跳んでいた。

なお、本篇にみるとおり、当時バクーとタブリーズの間には行商人の往来があり、友人や家族の間での手紙や伝言を託して届けることができたという。

【第三十七篇 作者附記】 いとこシユジャ（Stica ベルシア語 Shoga）は勇敢で風采の良い青年だった。バクーへの旅から土産をいっぱい抱えて帰り、綺麗な許婚をみつけた。アコーテオンを奏できれば巧く、昼過ぎに屋根のうえで大きなサマヴァル（サモワール 伝統的な湯沸

しと給茶の装置）で湯を沸かし、若者たちと談笑したものだ。残念だが、彼の運命は哀れなシネマの一幅の画面と化してしまつた。彼は成婚を待たずに腸チフスで亡くなった。空想上の人の（伝説の）ようになってしまつた許婚は一文の値打ちもない、ろくでなしの求婚者たちのものと成り果てた。

【第三十八篇 訳者注記】 ナナ・グズ（Nane Oz）とラフシャンダはともに親戚の娘で、作者が子供時代に一緒に遊んでいたという。特にナンナグズはシャフリヤールより十歳年長であつたが、詩人が子供時代に憧れを抱いた人であつたという。

【第四十六篇 作者附記】 マンスル・ハンは今テヘランに住んでいるが、故郷の村に対して義理堅く、何年か前に自分の財産を投じて、ほとんど井戸が枯渇したマスジッドを修繕した人だ。その善行によつて名が残っている。

【第四十七篇 訳者注記】 モッラ・イブラヒムは当時村で宗教的な学校（マドラサ）を運営した人物。シャフリヤール自身が最初にクルアーンと読み書きの基礎を習つたのもこの人物のものであつた。シャフリヤール自身の附記によれば「マドラサを運営して、村のなかだけでは

なしに、周辺のすべての人々の相談相手になっ

ていた。地主や近隣の有力者の子供たちも含め、皆彼に教わり、あらゆる恩を受けている。けれど誰に助けを求めることもしない。今でも時には自分の小さな畑のなかで、時には代償なしの仕事を請けて、ほんとうに自由に暮らしている」とある。なお彼の名に冠せられたモツラ (molra) ペルシア語 *molra* の語、そして詩篇の第4行にあるアフンド (axund) ペルシア語 *axund* はいずれもイスラームの宗教的指導者の呼称。

【第五十篇 訳者注記】「シャムの廃墟 (xarabeyi-San) ペルシア語 *Khārah-ye Sham*」という言葉は、シーア派ムスリムにとつて重要な信仰上の悲劇的場面への隠喩的な言及と考えられる。それはカルバラーの戦いでイマーム・ホセインについて敗北を喫した者たちが、ダマスカスへ俘虜として運ばれ、そこでウマイヤ朝カリフであるヤズィード・ビン・ムアーウィーアのもとで辱められる情景である。

【第六十七篇 作者附記】ダムガヤ (Dangaya) 岩の屋根」とは巨大な岩だ。樹木の枝のように山から分岐して、屈まっている。岩の下に部屋のような洞が形づくられていて、冬に、夏にと旅人や牧童が寒さ、暑さから逃れる場所だ。そして岩屋根の上によつて周囲の景色に見入つて

楽しむ子供たちもいたものだ。

【第七十四篇 作者附記】この詩篇は「コログル (Koroglu)」の物語についてだ。コログルのお話があると、私も話が終わりまで聞かなければ眠れなかったものだ。コログルの物語はアーザルバイジャンの英雄譚で最もよく知られたもののひとつだ。話の筋はこのようなものだった。主人公のコログルは息子のエイヴァズを戦に送り出した。エイヴァズは日没になつても帰つてこない。コログルは夜の闇のなかであらゆる方角へ視線を走らせ、黒いものでもくつきりと見分けていた。ときには風に、ときには鶴の群に息子の行方を尋ねていた。闇に朝の光りが射し、朝も早くに、コログルは音に聞こえた名馬の跨ると戦いに打って出た。敵を打ち負かし、捕らわれていた息子を解放し、連れて帰った。エイヴァズの帰還とともにお話は終わりだった。

(訳者補注) コログルはテュルク系諸族に広く伝わる伝説上の英雄。トルコでいうキョロール (Koroglu)。トルコのキョロールは抑圧者に抵抗する義賊の物語として人口に膾炙しているが、アゼルバイジャンにおけるコログル物語はイスタンブル、エルズルムなどアナトリアへ向かつて遠征にゆく『デテ・コルグト』風の英雄戦記として性格をもっている。エイヴァズ

については、多くの伝承で、配下の英雄たちのなかでもコログルがひととき親愛の情をしめした若者と伝えられる。

本稿は二〇一五年六月二十日に当研究会で開催した公開シンポジウム「トルコ文学越境」の際に訳者が担当した基調講演の資料として配布した翻訳から、多少なりとも拡大して作成したものである。当日は未定稿として作成し、その後大幅な見直しをかけたが、未だに自信のもてない箇所も多く、また全編完訳にも道半ばである。その意味では、なお諸先輩方のご指導をお願いしたいと思います。